

短編小説
清吉通り

池田耕路義

清吉通り

浜通り商店街のなかほどにある、『ローズ化粧品店』のシャッターが、いつものように夕方降ろされたが、翌朝になっても開かなかった。

そして、次の朝も開かなかった。

子供のいない六十前の女主人は、商売柄か頭髪を茶色に染め、血を舐めたような真っ赤な大きな口で店先でよく喋っていた。

誰にでも愛想よかった。いつも花柄の派手な服を着込み、袖をひらひらさせながら、客あしらいをしていたものである。

その彼女が突然店を閉じた。夜陰にまぎれて姿を消したのである。

二ヶ月前には、『橘米穀店』が店じまいをしたばかりである。

商売がたちゆかなくなって、櫛の歯がポロポロ抜けるように、ここ二、三年のあいだに次々とシャッターを降ろす店が増えてきた。

誰も驚きはしなくなった。珍しくともなんとも思わない。いつも見慣れた光景なのである。しかし、誰にもとめることの出来ない現実が浜通り商店街にあった。

海岸沿いに伸びるこの浜通り商店街は、かつては様々な店が低い軒を連ねそれなりに賑わっていた。

今では七、八メートルおきにシャッターが降ろされ、黒く錆び付いたままで放置されている始末なのである。浜通りではなく、シャッター通りになってしまった。

茶褐色の鉄骨が色剥げして、ところどころ黒いまだら模様になったままの低いアーケードが、今にも崩れ落ちてきそうに見えるのも、

その頃は華やかだった照明灯が、夜になってもぼんやりと煤けたように見えるのも、人の往来がめっきり減ったせいかも知れなかった。

時折、腰の曲がった、コオロギのような老人が手押し車を押しながら、よたよたと歩く姿しかこの商店街には見えなくなってしまったのである。

そういえば、半年前に廃業した『ひまわり美容室』の跡に、ついこのあいだ鍼灸・マッサージの『三九堂』が開業したが、

老人達はそこを目当てに朝早くから通っているのだ。

子連れのお母さんの買い物姿など、今はほとんど見かけることはなくなった。

老朽化したビルを取り壊し、長年更地だったJRの駅近くの場所に、地方の小さな町には不釣り合いな大型スーパー『あさひ』が三年前に出来たあおりで、老舗の『青山青果店』と並びの『村野食料品店』の二つの店などは、いちはやくあおりをくって吹き飛ばされてしまったのである。

その『あさひ』は毎週月曜日には特売日を設け、大安売りをを行い客を集めた。まるで糖蜜に群がる蟻のように、近在の住人が群がっていった。

この町にこんなに人がいたかと思わせるほどの賑やかさであった。

浜通り商店街が錆びれていくのも仕方のないことであった。

そして、取り壊された二つの店の跡地に、あつという間にコンビニができたことも、衰退に拍車をかけたようである。

それに呼応するかのようには、もうひとつ、この町の基幹産業であり、近在では大企業であった『内海造船所』が、不況の嵐をまともに受けて倒産したことも要因であった。

下請けの鉄工所や、その周辺の木工所や工具店など、関連する会社が数件あったが、将棋倒しのようにバタバタとあっけなく連鎖倒産した。

数百人の男達がいっきよに職を失った。

肝心の造船会社にも再建の策はなかったし、町にもその後の施策がなかった。ただ、手をこまねいているばかりであった。

以来、そのまま放置されている周りの光景は、まさに廃虚そのものであった。荒れるにまかせたままの大きな図体のクレーンや建屋は、

ぺんぺん草に覆われた屍でしかなかった。海から吹きつける潮風が錆びを早めた。

行き場を失った多くの人々が、死にかけているこの町に見切りをつけて、何かに追い立てられるように去っていった。特に多くの若者が背を向けてしまったのである。

今、町は瀕死の状態とってよかった。

浜通り商店街に入る一角には、数軒の立ち呑み居酒屋も軒を連ね、毎夜、酔客でざわついていたが、どの店もとっくの昔に廃業して、跡形もなかった。

辛うじて一間間口の小さな『居酒屋 まるや』だけが残った。

しかしその『まるや』もご多分にもれず、いつ店じまいをしてもおかしくない状態であったが、昔なじみのリタイヤした町の老いた常連客でどうにか商いをつづけていた。

ほんの数年前までは、町は活気に満ちあふれていたのだ。

屈強な男達は隊伍を組み、朝夕の工場への行き帰りには通行人と肩をぶつけあいながら、ざわざわとまるで祭のような賑やかさと、

油臭い体臭を辺り一面にまき散らしながら、浜通り商店街を通り抜けて駅へと向かっていったものである。

その中の数人が『まるや』の餌食になって暗い店内に引き込まれ、毎夜、粗末な板張りのカウンターにぶらさがり、安酒をあおった。

店内はタバコの煙りと埃とで黒褐色に煤けた低い天井の隅はめくれ、いまにもそこから、鼠が顔を出しそうであった。裸電球のコードには薄い蜘蛛の巣がこびりついていて、

カウンター越しに手を伸ばせば届きそうな所に、薄っぺらなむき出しの棚があり、数少ない食器が並んでいた。その後ろの壁は、煮炊きの匂いと湯気が染み込んで、まるで油

地蔵のように黒光りしていた。

六、七人も入れれば溢れるような狭い店内から、外に弾き飛ばされた男達は、入口脇に置かれている床几に座り、その周りにたむろした者と一緒になって、大皿に盛られた“おでん”をつついた。

爪先に油の染み込んだ黒い手で持ったコップ酒を振り回し、喚き、唄い、唾を吐きながら騒がしく時を過ごした。

店を仕切る女主の房は、背が低く、丸虫のように体は丸まっていたが、白黒混じりの頭髪をひつつめにして、小柄な体でてきぱきとよく働き、闊達であった。口八丁手八丁のエプロン姿のよく似合うしっかり者であった。

客同士の諍いも、彼女の一喝でたいていは治まった。客あしらいはおてのものであった。

みんな元気で若かった。小競り合いも毎晩のようにおきた。

清吉もその中のひとりであった。一番の古株といってもよかった。

五年前に女房を亡くした後もまだ『まるや』で呑み続けている。

房の亭主の富造は、清吉と時を同じく造船所をリタイヤした。その後から、店を手伝うようになったが、客と一緒に酒を喰らってばかりで、一向に動こうとはしなかった。仕切るのは相変わらず、女房の房のほうであった。

ふたりは大男で、七十を二つや、三つは越してはいるが、いまだに矍鑠としていた。永年、造船所でともにハンマーを振り降ろしてきた鋼鉄のような腕っぷしは、衰えることを知らなかった。

しかし、どちらかという、すっかり頭髪が消えた富造より清吉のほうが、若く見えた。大きな五目頭で、赤黒い顔に刻まれた皺は深かったが、目は黒々と獲物を射るような眼差しであったし、声も大きかった。

清吉の毎晩の定番は、他のものにはいっさい目もくれず、木綿豆腐に烏賊の塩辛を乗せて、それを刻み葱といっしょにかき混ぜて、二合の酒のあてにした。

よくも飽きもせず毎晩食べれるもんだね、房も感心するが、富造も、お前さんも歳なんだからさ、もうちょっと考えて食べなくちゃだめだぜ、心配したり、呆れ顔もするが清吉は聞く耳を持たなかった。

「清さん、知ってるかい」

房がカウンターから首だけ出して、清吉の定番を差出しながら言った。

「どうした。なにかまたあったのか」

盃を一口あけて問うと、

「またじゃないよ。ホレ、転んだんだよ。例によって」

「今度は誰だ」

「名前も顔も知らないけどさ、どうも山手のほうの婆さんらしいよ」

「いつのことだ」

「昼前だったかね、ホレ、このあいだ開業したばかりの鍼屋に行く途中だったらしいよ。それがさ、今度は町村さんとこの前で、転んだんだよ。その拍子に、頭からシャッターに突っ込んでいったらしくてね、救急車が来て大騒ぎだったんだよ」

「町村って、あの本屋の茂さんとこだな。奴さん、たしか夜逃げしたんだよね。へえ、そうかい。知らなかったなあ」

「知らないって、清さんどこへ行ってたのよ」

「大通りの『ラッキーセブン』だ。ひと稼ぎしようと思って弾いていたけど、大負けだ」

「結構なご身分だねー、まったく」

「なにを言う、結構も、日光もないよ、他にすることがないんだから仕方ないよ」

「これで、今年になって四人目だよ」

「よく覚えているな。家でおとなしくしてりゃいいんだよ。年寄りは」

「そんなこと私に言ったって知らないよ。あんただって年寄りじゃないのよ、よく言うよ」

「舗道にガタがきてるからな、この商店街も危ないんだよ。まったく、困ったもんだな」

「そんなの関係ないと思うよ。転ぶような障害物なんて無いよ、商店街の舗道には」

私ね、考えたんだけどさ、どうも、皆が転ぶのは、店を閉じてシャッターを降ろしている家の前に限られてんだよね。誰もいない家の中から、手招きして呼んでるんかね。

こっちだよ、こっちへおいでよってさ。房が身を乗り出して清吉の顔に近付けて声をひそめてそう言った。

「馬鹿野郎、そんな訳の分からないことを言うもんじゃないよ」それまでふたりのやりとりを聞きながら独酌していた富造が房に言ったあと「清さん、相手になるなよ。

このところ、婆さんこんなことばかり言ってるんだ。幽霊話しだよまったく」

「なに言ってんのよ。ほんとの話だよ」

「偶然だよ、それは」盃を置いて清吉が口をはさんだ「富さんの言う通りだよ。そんなの全くの幽霊話しだよ」

「偶然じゃないよ。考えてもみなよ、ほら、橘の米屋、矢野の菓子屋に上山のお茶碗屋さん、みんな店じまいして空家じゃないのよ。みんなが訳もわからず、突然転ぶのはそんな家に限られてるのよ。転ぶだけじゃないよ。頭からシャッターにさ、勢いよく突っ込んでいくんだよ。中から強い力で引っ張られるようにさ」

まるで見て来たように、房は一気に喋ったあと、不服そうにあひる口をしたまま黙りこんだ。彼女は突拍子もないことを言い出したものである。清吉は今まで、そんなことは一度たりとも考えたことはない。

無人の家のシャッターが道行く人を手招いている。

そんな馬鹿なことがある訳がない、と清吉は否定はしたものの、仮にそれが事実だとすれば、不気味である。いや、まさかそんなことはない。たんなる偶然だろう。

いろいろ思いを巡らせた。どっちにしても房の話は気色が悪いしどうも気になる。

気になると言えば、店を出がけに彼の後ろから言った彼女の言葉も気になった。

「浜屋さんも、そのうちに空家になるかもよ」

「浜屋がどうかしたのか」振り向きざま訊ねると「どうも大きな借金を抱えているらしいよ。内緒の話しだけ」

なんでも、魚市場に出入りする仲間の連帯保証人になっているらしい。ところが、当の本人が夜逃げして、浜屋にその銚先が向かってきた。このあいだ、酔っぱらってぽろっと愚痴ってたよ。うまく治まりゃいいんだけどね。質屋の質草と違ってさ、恐いよ、連帯保証人というやつは。人が担保だからね。

富造が房の話に今度は無言で相槌をうった。

清吉は口をあぐりと開けて、その場に立ちすくんだ。

なんということだ。まさか『浜屋鮮魚店』の貞男が。言葉が出ない。力なく表に出た。

陽はすでに沈んではいたが、浜通り商店街に入ると、七時を少しまわったばかりだというのにどの店もシャッターを降ろしていた。時折吹き抜ける初冬の浜風がシャッターを震わせた。カタカタと声をひそめて哭いているようであった。他には物音ひとつしない。まるで海の底にいるように深閑とした静けさである。なんとも無気味だ。アーケードの上から漆黒の闇の中に落としている、一条の薄い灯りまでもが、風に揺れているように見えた。

彼は、茂さんの家の前に立った。

『町村書房』とシャッターに書かれた、極太明朝体のオレンジ色の文字が、ところどころ剥げ落ちて判読しづらくなっていた。

そのシャッターにそっと触れてみた。カタッと音がした。無人となっているはずの家の中から、茂さんの声が微かに聞こえてくるような気がした。

山手の婆さんらしい人が頭から突っ込んで行ったのは、茂さんの怨念か。それとも、まだこの家に未練があるからか。それを誰かに知って欲しいからか。

本には全く興味がなく、一度も店内に足を踏み入れたことはなかったが、茂さんは誰にも愛想がよかった。清吉にもよく声をかけてくれた。そんな茂一家が忽然と姿を消したのだ。

今、彼らはどこで、どう生きているのだろう。

そして、無人となっている他の店のシャッターはどうなっているのだろう。

清吉はトンネルのような、歯抜けの通りの先まで目をやった。野良猫が通りを横切った以外に、人の姿はどこにも見えなかった。山側の大通りを通る車の音だけがかすかに聞こえた。

いつからこんなに寂れてしまったのか。何故シャッター通りになってしまったのか。誰のせいでこうなってしまったのか。

『青山青果店』と『村野食料品店』がいち早く吹っ飛んだが、続いて『種田履物店』もそうであったし『町村書房』『上山陶器店』『矢野和菓子店』それに『ひまわり美容室』など、次々とシャッターを降ろしていった。

彼らの胸には、ただ無念さだけが去来したに違いない。

『橘米穀店』が最後かと思ったが、つい先日には『ローズ化粧品店』もが店を閉じてしまったのである。

その主たちは、家族ともども、姿を消した者もいたし、同じ町の片隅に居を移して、身をひそ

め新しい生き方を探っている者もいた。閉じたシャッターの奥でひっそりと年金暮らしをしている者もいた。

名ばかりの商店会の会長をやっている、いつも気難しい顔をした、お茶販売の『清月堂』などを含めて、今は七、八軒が辛うじて商いをやっているだけである。

もうこれ以上の店じまいはごめんだ。それでなくても、この商店街は口ウソクの灯が消えかかっているのだ。その灯をもう一度、明るく灯したい。

閉じられたままの、シャッターをすべて開けて、以前の賑やかさを取り戻したい。いろいろ、方策を考えてはいるが、八十を越した彼の硬い頭では妙案は浮かんでこなかった。

いつも頭を小刻みに振っている、無愛想な『鎌田薬局』の禿頭親爺とは清吉はどうも気が合いそうになかった。言葉を交わしたこともない。店先で顔があっても互いにそっぽをむくほどであった。

頭髪をべったりと撫で付けて、時折だが、和服を着てなよっている『田中呉服店』の友次は『まるや』に時折顔を出すことがあった。酔えばだれ彼なくねちっこく、お姐言葉で絡む酒癖の持ち主であった。体をくねらせ絡む所作は女とみまがうほどであった。酔うほどに女に変わっていく。

逆に彼の女房は男勝りで、店の切り盛りはほとんど彼女に負うところが多かった。最近は洋品も扱い始めた。

いつだったか、元気者で威勢のいい『浜屋鮮魚店』の主の貞男と『まるや』の中で、酔いにまかせて些細なことから口げんかをしたことがあった。

たまたま隣に座っていた友次の体から、香水の匂いがして酒が不味くて仕方ない、と貞男がこぼしたことが原因である。

「ふん、なに言ってんのよ、あんたのほうが魚臭くて鼻がひんまがりそうだよ。それでも私はね、辛抱してんだよ」

丸い目をさらに大きく開いて声を荒げた。

「魚臭くていいじゃねーか。酒のつまみにもってこいだ。おまえさん男だろ、ぷんぷん女の匂いをふりまいてさ。その香水の匂いがよ、酒のつまみにでもなると思うのか、このうすら馬鹿が」

「なんだと、やるってんの」

そう言い返した友次は、よろけながら立ち上がったとおもうと、着物の裾を勢い良く捲り上げた。

その拍子に彼の股間にぴったりとへばりついている、真っ赤なパンツが見えた。その小さな赤いパンツがもっこり盛り上がっていた。

それを目にした清吉達は、一瞬呆気にとられたが、すぐに涙がでるほど手を叩いて大笑いした。

友次は血相を変えて、勘定も払わず、逃げるように店を出ていった。

二三日して、彼は何かわぬ顔をして『まるや』で、また酒を呑んだ。

振り鐘を鳴らしながら、毎日、自転車で豆腐を売り歩いている、真面目いっぽうの『白井豆腐店』。

最近はまだい物の時計まで並べはじめた『今村電器店』。

清吉は貞男とは、気があった。

貞男は『まるや』で清吉と顔をあわすと離さなかった。朝、早いんだろう、もういいかげん、銚子を納めろよ、とたしなめても聞く耳を持たなかった。朝か一、朝は寝てても、起きててもやってくるよ一、訳の分からないことを言った。それでも、夜の明けぬ前から、町外れの漁港へ魚の仕入れに車で走っていった。六十前の若さには清吉も脱帽ものである。

そんな貞男の店もご多分にもれず、最近は客の数より、蠅の数のほうが多くなり、売れ残りの魚貝類は総菜店の『江戸や』が仕入れた。

房はその浜屋も危ないかもしれないと言った。

一本気の貞男は、仲間の連帯保証人に二つ返事で引き受けたに違いない。まさか当の本人が夜逃げするなど、そのときは夢にも思ってもいなかったのだろう。その彼がいま、がんじがらめの身動きのとれない、担保物件になっているのだ。

浜屋に限らず、どの店もおしなべて青気吐息であった。それでも必死で商いをやっている。

かつては夜遅くまで、多くの人が商店街を歩き、客の出入りで賑わっていた頃が嘘のようである。

うす暗く細いトンネルの先にある『江戸や』と、二軒隣の最近開業したばかりの鍼屋『三九堂』の黄色い灯りだけが、帯となって店の前に伸びていた。

清吉の家は、その『江戸や』の横の路地を入った所にある。独り身のわび住まいである。

「清さん、今、ご帰還かい」

店の後片付けをしていた為子が清吉を見つけて、体を伸ばしながら陳列越しに声をかけてきた。

「おー、今お帰りだー」

「結構なことで。はい、今晚のおかずだよ。どうせご飯気もないんだろ、いっしょに入れといたよ。酒ばかり喰らわないで、ちゃんと食事をするんだよ」

まるで子供を諭すように言いながら、ふたつのタッパーを渡した。ご飯の下に、半身の鯖の塩焼きと厚焼きの煮物が見えた。

そんな為子に余計なお世話だよ、とは口が腐っても言えない。

清吉は朝、昼は適当にすませるが、夕食は『江戸や』の為子が毎晩、店の売れ残りを与えてくれる。勿論、毎月いくばくかの金を支払おうとするが、彼女は、いらぬよ、あんたのことをいつも心配してんのよ、意味ありげなことを言う。こまめに面倒を見てくれている。口うるさいが彼なりに彼女を頼りにしているのだ。有り難いと思う。

丸顔の鼻回りにソバカスが点々とあるくらいで、化粧気はないがふっくらとした、色白の顔だちの整った六十を過ぎたばかりの女主人である。

「隆一は元気か。最近あまり見かけないな。十日ほど前にちらっと顔を見たけど」

「ああ、元気だよ。今、東京に出張中」

「へえ、公務員でも出張してあるんだ。忙しいんだな。それはそうと、嫁の幸子さんはまだ帰って来ないのかい」

「そうなのよ。実家のお父さんの耄けがひどいんだってよ。母親一人の手に負えないからしばらく帰ってこれないとき」

「困ったもんだな。施設にでも入れりゃいいんだよ。お前さん一人で店の切り盛りも大変だな。なんだったら俺、手伝おうか」

「結構、かえて足手纏いになるだけだよ」 気丈な為子はそう言って笑いながら、余った惣菜を奥の冷蔵庫に終いはじめた。

陳列に並べる惣菜の種類は決して多くはない。今では『浜屋鮮魚店』の売れ残りの魚とスーパーからの青物を使って惣菜にした。年寄り客が多いせいもあったが、こてこてした肉料理は一品たりとも作らなかった。

一人きりの仕込みには限界があり、必然的に品数も減っていった。

清吉の妻、咲子と相前後して五年前に亭主の作治を亡くした気丈な為子は、涙も見せずによく働いた。

当時大学生だったひとり息子の隆一を女手ひとつで卒業させた。その彼が県職員になり、近隣では一番大きな町である杉山市の出先機関に配されたのである。

一時間ほどかけて職場に通っていた彼が、やがて、妻を娶り一家をなしてからは、為子は隆一の女房の幸子とふたりで『江戸や』を切り盛りしているのである。

しかし、今は為子ひとりで食材の買い出しから、仕込みまでこなす、働きぶりであった。

もともと病弱で、おまけに永年心臓を患っていて入退院を繰り返す咲子のもとへは、商いの合間をみても、見舞いにもよく行ってくれたし、清吉やまだ高校生だったひとり娘の亮子の面倒も、みてくれたものである。

町の高校を卒業した亮子が、大通りにあるプロパンガスを扱う、燃料会社に勤めながら、家事一切をしばらく仕切っていたが、婚期を逸しそうで、清吉も為子も心配した。

隆一と所帯を持たそうかと、ふたりは話したこともあったが、亮子にひよんなことから、杉山市の化学会社に勤める男と縁ができ嫁いで行った。

清吉は月に一度は三才になる孫のもとに行くのが楽しみで、その日、杉山の町にやって来た。

浜通り商店街などと較べるべくもなく、杉山の銀座商店街はとてつもなく大きく、人通りの多さに毎度、目を見張る思いがした。土産にと洋菓子店のショーケースを覗き、品定めをしていたが、なにげなしに腰を伸ばし、首を反転したその先を見て、彼はあっ、と息を吞んで釘付けになった。

まぎれもなく『ローズ化粧品店』の例の化粧の濃い女主人が、小太りの中年男と腕を組んでこちらに向かって歩いてくるのを見たのである。どうやら亭主ではなさそうだ。

婿養子だという存在感のない亭主は、町の中学校の数学の教師をやっていたが、三、四年前に、人事移動で県境の山あいの村の中学校に、単身赴任していったきりである。

町ではあまり見かけたことはないが、目の前の男はたしかに亭主ではない。

清吉は、店先で棒立ちになって女を見つめた。相変わらず派手な顔づくりである。彼の四、五メートル先で、女も清吉だと気付いた様子で、やはり歩を止めてその場に立ちすくんだ。

「まあ一、小島の清吉さんじゃないのー」

男から瞬時に腕をほどいて、素頓狂な声を張り上げて満艦飾の顔を近づけてきた。

きつい化粧の匂いに、清吉は思わず顔をそむけた。

そうだ、あの匂いだ。思い出した。

今は廃虚となっている、かつて勤めていた『内海造船所』の正門脇に立っていた、初冬から冬にかけて咲くあの金木犀の匂いだ。その頃から、この匂いはどうしても好きにはなれなかった。

確かに最初は甘い匂いはしたが、その匂いが日を追って鼻につくようになっていった。気にし始めると、やがて、どうしようもない嫌悪感に襲われていった。毎朝、鼻をつまんで正門を足早に通り抜けて行ったことを思い出した。

連れの男はくるりと背を向けると、隣の時計店のショーウインドーの前に行き、いかにも品定めをしているような格好で腰を曲げた。

「おおー、ローズの山岡さんか。ひさしぶりだなあ。元気だったかー。みんなあんたのことを心配してるよ」

嘘である。誰も気にもとめないし、心配なんかしていない。清吉の精いっぱいのおべっかである。

「相変わらず、お元気そうですね」

「いやいや、そうでもないですよ。もう歳には勝てません」

大きな手で、大きな五目頭を撫でて答えた。

「町のみなさん、お変わりないですか」

「みんな、相変わらずですよ」

「そう、よかった。清吉さん、私ね、また町に帰ってもう一度店を開けますからね」

「へえー、そいつはいいことですな。ぜひ、そうしてください」

「もともと、親から譲ってもらった家ですからね、おめおめと、他人には渡せないわ」

「そりゃそうです。いつまでも空家にしていたら、勿体ないですよ。きっと帰ってきて下さいね。待ってますよ」

「それじゃ、その日まで、お元気でね。またお会いしましょう」

「はい、待ってますよ」

女はにっと笑ってその場を離れた。

男が清吉の前を微笑みながら一礼して通り過ぎ女の後を追った。微かに柑橘類の匂いがした。女の好みの匂いだろうか。ふたりはふたたび、腕を組んで通ざかって行った。

何ものかは知るよしもないが、新しいパトロンでも見つけたか。肝心の教師である亭主とは別れたのだろうか。女の年の割には弾けるような後ろ姿を、清吉はしばらく呆然と立ちすくんで見送った。

城山の南回りのバスに乗って、一ヶ月ぶりに亮子の家に来た。建て売り住宅を手に入れた彼女は、手狭だったアパート暮らしから解放されて喜々としている。その頭金の一部を清吉は、退職金の一部を用立ててやった。だから、いつでも大きな顔をしてやってこれる筈なのに、月に一度しかやってこず、来ても二、三時間ほど腰を据えるだけで、そそくさと帰ってしまうのである。

玄関口まで飛んできた、三才になる孫の昌太を抱いたまま、上がり框に腰を降ろして靴を脱ごうとすると、すぐその後から亮子が「連絡くれたら、迎えに行ったのに」ぶつぶつ言いながらつかつかと音をたてて出てきた。

相変わらず元気な子である。少しも変わってはいない。幼いころから男の子に混じって、夕方遅くまで、ボール蹴りをして遊んでいたし、中学時代には、同級の男の子と喧嘩をして、負かしたこともあった。目尻の吊り上がった、男勝りの気の強さを清吉夫婦は心配したものである。

当然のことながら、周りの級友からは一目おかれていたが、決して羽目を外すようなことはなかった。負けず嫌いで、学校の成績もそこそこ良かった。

母親の咲子に似て器量もよい。清吉たちの自慢の娘でもあった。病弱で寝たり起きたりの咲子とは正反対の元気者である。

銀座商店街の洋菓子店で買い求めた土産の箱を亮子に渡しながら、

「珍しい人にあったよ」

「珍しい人って誰なの」

「ローズの山岡さんだ」

「ローズさん。あー、あそこ店じまいしたんだってね。噂で知ってるよ」

「男と腕組んで歩いてたよ」

「あっ、私知ってる。このあいだ銀座商店街でふたりをちらっと見た。にこにこしながら歩いているのを見たわ。あの男、ご主人じゃないわよ。私、知ってるもん。ご主人はね、私の中学時代の担任だったから」

「へえー、亮子の担任だったのか、亭主は」

「そうよ。あのふたりは、この町に住んでいるみたいね」

「その亭主はどうしたんだろうな」

「捨てられたんでしょよ。きっと、あの女に。あの先生の渾名はね、〈たまちゃん〉と言ってみんなに馬鹿にされていたのよ」

「なんだ、その〈たまちゃん〉って言うのは」

「子猫みたいに生徒の誰にでもすり寄っていくのよ。ほら、町の田中呉服屋のご主人とそっくり、おカマみたいなあの女、あの女に似てるのよ。ああ、気色悪い」

「そうか。そんな男なのか。女房に愛想つかされるのもわかるような気がするな」

「どうしてるんだろうな、あの〈たまちゃん〉は」

遠くを見つめるような眼差しで、昔を思いだしている様子であったが、すぐ「お父さん、今夜は泊まっていくんでしょ」お茶をいれながら言うと「いや、遠慮するよ。辰次

君に宜敷く言っといてくれよ」一口飲んで答えた。

「家に帰ってもなにもないでしょうに。いちどくらいは泊まってゆっくりしていったらどうなの。夕方には旦那も帰ってくるしさ」

酒もタバコもやらない真面目で、無口な男とは同席しにくい。息が詰まりそうなのだ。亮子親子が幸せであれば、それはそれでいいことだし、無論彼が憎いわけではないが、どうも話が合わない。町の化学工場に勤めている、婿の辰次がやがて帰宅するだろうが、昌太の相手をしばらくしていた清吉は、バイバイ、大きくなれよ、風邪ひくなよ、と言いながら、もう帰り支度をし始めた。

「なんなのよ。相変わらずせっかちな。いま、来たばかりでしょう」

彼女が後ろから、不服そうに言った。

「まあ、そう言いなさんな。お前と昌太の顔をひと目見ればそれで充分だ。これでも忙しいんだ」

「嘘ばかり。なにが忙しいのよ、仕方ないわね」不服そうに言った後「江戸やのおばさんにもよろしく言っといてね。あんまり、お酒ばかり呑んじゃ駄目だよ」

為子と同じことを言った。たった二時間ほど、亮子の家にただけで、そそくさと駅に向かった。

夕方、浜通り商店街が珍しく騒然としていた。久しく見ることのなかった人ばかりである。そこそこ人はいるものだ、と彼は思った。

「おー、清さん、いま大変だったんだよ」

あの赤いパンツの友次が、清吉を見つけると人の輪から離れて駆け寄ってきた。

昼間のローズ化粧品店の女と同じ匂いがした。男のくせして、清吉は顔をそむけた。

「なにかあったのか」

「そうなんだよ清さん」為子が『江戸や』の店から小走りで出てきて「ほら、まるやのおかみさんよ、うちに惣菜を買いにきてくれたんだけどさ、その帰りにね、種田さんの店先で転んじゃったのよ。びっくりだよ」

今は空家になっている、『種田履物店』に向かって顎をしゃくりながら言うと、また小走りで店に帰って行った。

「その拍子に、閉ってるシャッターにさ、猛烈な勢いで頭から突っ込んで行ったらしいのよ。大きな音がしたから、みんなが気付いたんだ」友次が言葉をつないだ。

「どうも釈然としないな。これで何人目だ、この通りで転ぶのは」例の気難しい顔をした『清月堂』の主人が、腕組をしたまま友次の後ろから声をあげた「それにしても、困ったもんだな。ますます人が寄りつかなくなるなあ」

『清月堂』は歯ぎしりする思いであった。

「そうよね。今年に入ってこれで五人目かな」友次が『清月堂』に振り向きながら言ったあと、今度は、清吉のほうに向き直って「両手と顔を擦りむいてさ、救急車でいま運ばれて行ったばかりだよ」と清吉の顔を覗きこむように小声で言った。

この男も『まるや』の房のように転んだ人数までよく覚えているものだ。

「そうか、そいつは大変だったな。夜にでも店に行ってみるよ」

踵をかえした清吉に、

「今夜は、休みだよ、きっと」

友次が彼の背中にそう言った。

皆が転ぶのは、店を閉じてシャッターを降ろしている家の前に限られてんだよ。いつの日だったか房が清吉に言ったことは本当かも知れない。その房が身をもって証明した。

周りの人間は誰もそんなことには気づいてはいないだろう。

当の年金暮らしの種田夫婦は、外の騒ぎを知ってか知らずか、外には出て来なかった。

人の輪がとけたのをしおに『江戸や』の店先までくると、「はい、今晚のおかず。ご飯はあるの」為子が惣菜の入ったタッパーをいつものように清吉に手渡した。

「ん、大丈夫だ。まだ残ってる」

「あ、そう。それはそうと、亮ちゃんは元気だったの」

「おかげでね、みんな元気だったよ。孫も大きくなってた」

「そうかい、そりゃよかった」

清吉はそこではっと気がついた。

「さっき、気がつかなかったけど、浜屋の姿が見えなかったな」

「そういえば、そうね。いっちょがみのあの人が姿を見せないなんておかしいわね」

「そうだなあ」

ふたりは首をひねった。

「忙しいんじゃないの」

そんな筈はない。金策に走りまわっているに違いない。彼はそれを口には出せなかった。貞男が哀れで仕方がなかった。

違い棚に置いてある咲子の額縁入りの遺影の前に、江戸やでもらったタッパーを置いて手を合わせ、ひと風呂浴びて家を出た。

『まるや』の店の中に灯りがついていた。

房さんは病院から帰ってきたんだな、と思いながら中に入った。

心細い裸電球の橙色の灯りの下で、富造が背を丸め、カウンターに両肘をついて独酌していた。

大柄の彼の体が急に萎えたように小さく見えた。その影さえ貧弱に見えるのだ。はじめて老いを見たような気がした。

あの年を感じさせない豊饒とした立ち居振る舞いの彼は、もうここにはいない。

清吉はその姿を自分に置き換えてみた。ハッと思いついたように年を数えた。お互い七十をとくに越している。悔しいことだが、富蔵のように萎えしぼみ、老臭が体全体を覆っているに違いない。

老いが襲いかかってきている。動かすことのできない現実だ。

いいようのない淋しさと不安をはじめて感じた。

今までとりたてて意識などしたことの無い自分の老いを、娘の亮子や、『江戸や』の為子達は

、どんな思いで見ているのだろう。

「お母ちゃん大変だったらしいな。具合はどうだ。病院からまだ帰ってないのかい」

清吉は富蔵の背中に小さく声をかけた。

「そうなんだ。頭も骨にも異常なしだ。顔にも擦り傷ができたけど、その傷のほうも大丈夫だ。たいしたことはなかったんだけどな、どうも様子がおかしいんだ」

力のないかすれ声で答えた。

「おかしいというと、どこか悪いのか」

「うん、血圧だ。異常に高いらしい。それに、どうも心臓がちょっとおかしいらしいんだ。いや大丈夫だ。たいしたことはない」

富造は自分に言い聞かせるように手を振って打ち消した。

「それだったらいいけどな」

「いつもの用意するよ」

そう言うと、なにかを振り切るように勢いよく立ち上がり、カウンターの中に消えた。

「お母ちゃん、なんともなければいいけど、心配だなそりゃ」

カウンター越しに声をかけると、

「そういえば、前から目眩がするとよく言ってたな。医者も検査をして、様子を見ると言ってたから、しばらく入院だな」

元気のない声がかえってきた。

「それがいいよ。今まで何年もさ、よく働いてきたもんな。無理をし過ぎたんだよ。いちど見舞いにでも行くよ」と言うと「いいよ、いいよ、そんな大袈裟な病気じゃないんだからさ」と言って、さっきと同じように手を振った。

いつもの木綿豆腐に塩辛をのせた清吉の定番を出すと、また力なく丸椅子に座った。よく見ると、いつもの刻み葱が入っていない。忘れている。気が動転しているに違いない。

それ以上、会話がはずまなかった。ふたりは黙りこくったまま、カウンターに顔を落として酒をちびちび呑んだ。

清吉は『まるや』をそうそうに引き上げた。

例の『種田履物店』の前まできて立ち止まった。周りは暗く、静まりかえっている。黒いシャッターが微かに揺れ動き、今にも中から、しばらく顔を見ていないが、あの下駄のような顔をした男がふいと出てきそうな気がした。生きているのか、死んでいるのか、この夫婦は、今完全に世間と没交渉である。姿を見せない。

翌朝、『浜屋鮮魚店』の貞男が仕入れの漁港へ向かう途中、車ごと海に転落して死んだ。

いくら陽の出ていない暗い早朝とはいえ、通り慣れた道で運転を誤るはずがない。

結論は自殺。そうとしか考えられなかった。

異変を知り駆けつけた、彼を知る清吉たちみんなの思いだった。町は騒然となった。野次馬が死体を取り囲みごったがえした。

陸に引き上げられた貞男の苦虫を噛みつぶしたような苦渋の顔色は白蠟そのものだった。体は

ズボンのベルトを切らんばかりに、河豚のように膨れ、横たわっていた。

ズボンやジャンパーや頭髮に染み込んでいた海水がポタポタと落ちて、体の周りを黒く濡らし、高くなってきた初冬の弱い陽がその海水をチカチカ照らしていた。

あれほど元気で、威勢のよかった彼は今、ぶざまな姿で清吉たち衆人の目にさらされている。

「フヒャー」友次が清吉の肩ごしに奇声をあげた。

「車と心中か。ぶざまだな」誰かがぼつんと言った。

「死ぬこともなかろうにな。簡単に命を捨てたもんだな」そんな声も聞こえた。

「安っぽい死にかただ」吐き捨てたような声も聞こえた。

清吉はその安っぽいという意味が瞬時には理解できなかった。

しかし、よく考えてみると、今ここに横たわっている貞男の死体は、店先に並べられている鰯やさんまよりも安っぽいかも知れないと思った。何の値打ちもないのではないか。

ここしばらく顔を合わせてはいなかったが、いつもの大きな声をあげながらむっくり起き上がってこないものか。

「朝は寝てても、起きててもやってくるよ」と、呑気に言っていた彼も、人に言えない切羽がまった苦悩をずっと抱え、そして押し潰されたのだ。

連帯保証人という魔物に担保にとられた、貞男のなれの果ての姿であったが、逆にその魔物から解放された安堵の姿でもあった。

『まるや』の房達にぼろっと愚痴ったのは、それはそれで、ひとときでも苦悩の呪縛から逃れたい一心だったのかも知れない。

知らせを受けて駆けつけた女房は、貞男に取りすがり髪を振り乱して泣き叫んだ。見てはいられなかった。

また、一軒、店が無くなる。跡取り息子でもいれば別だが、この女房ひとりで『浜屋鮮魚店』を続けてはいけなйдらう。

清吉は貞男に手をあわせて、その場を離れた。足が重い。心も重かった。

無意識のうちに、足枷を引き摺るように、海岸沿いを歩いていた。意思とは反対に、なにかが彼の背中を押している。

細い海岸沿いの道の向こうには魚市場があり、さらにその先に『内海造船所』がある。永年、通い慣れた道である。海との間には仕切りなどない。手を伸ばせばすぐその海が掴めた。

貞男を飲み込んだ海は、この時期にしては珍しく凪いでいた。穏やかな表情が何故か憎々しく思えた。まるで貞男という担保物件を、手に入れて満足感にひたっている。そう見えた。

清吉は凝然と海を睨み付けた。

貞男の顔が浮かんだ。次に女房の咲子や『江戸や』の為子の夫の作治の顔が浮かんだ。

作治も働きものであった。店先で早朝から、貞男と大きな声で話しているのが、清吉の家の中まで聞こえてくることもあった。

その作治が風邪をこじらせて、肺炎で急に亡くなったことを知った貞男は、遺体をゆすりながら声を上げて泣いていた。

みんな清吉の前から消えていった。馬鹿正直に、律儀にである。

死んだままの『内海造船所』の正門に張り巡らされた鉄条網越しに、金木犀が清吉を見下ろしている。今も健気に立っている、金木犀の匂いだけは生きている。その匂いは好きではなかったが、今となってはなんだか愛おしくさえ思えるのである。

彼はひとり取り残された、とは思いたくなかった。

貞男が茶毘にふされたその日から『浜屋鮮魚店』のシャッターはふたたび開かなかった。

一週間ほどたったある夜、店の後片付けを終えた為子が、清吉の家の玄関を叩いた。

「男やもめの家に来るなんて、おだやかではないな」

そう言いながら、彼女を招き入れた。

普段着姿を見るのは滅多にないことである。土間に立っている彼女が別人のように見えた。いままで清吉は為子に女を感じたことはなかった。化粧をしているのか、女の香りがした。

清吉は思わず目をそらしながら「まあ上がりな」手招きし「どうした、なんか話でもあるのか」

「うん、ちょっとね」

居間に座った彼女は、違い棚の咲子に手を合わせた。そして、座りなおすと、買い物袋の中から缶ビールと小さなビニール袋に入ったいかり豆を取り出し、ちゃぶ台の上に置いた。

「今夜はふたりで飲みましょう」

いつものあの突慳貪な口調は陰をひそめている。しおらしく静かにそう言った。

「なんだよ、気色悪いな」

袋から豆を取り出し、ビールを開けて清吉の目の前に置いた。清吉が一口飲むと、彼女も缶を開けて口にもっていき一口飲んだ。

しばらくふたりのあいだに沈黙が続いた。

彼女は両手でビール缶を挟み、伏し目がちにくるくるまわしていたが、「私ね、店を閉じようと思うの」突然切り出した「今まで働き詰めできたけど、年内で店を終りにしようと思ったの」

ため息まじりに言いながら、ビールを置いた。

また櫛の歯がひとつ欠けていく。

「なんだよ、急に。浜屋が無くなったからか」

「んー、それもあるけどさ、ずっと前から考えていたの。きりもいいしさ、このところ、客足も減ったからね。私、もう疲れた。買い手か、借り主があらわれるまで家はこのままにしとく積もりよ」 「店を閉じた後どうするんだ。隆一はどう言ってんだ」

「杉山に家を買ったのよ。だから私にね、嫁ももうすぐ帰ってくるから、三人で一緒に住もうとってくれてるのね」

「そうか。急な話だな。淋しくなるな」

清吉はそう言ったあとで、為子をいきなり引き寄せ抱きしめた。

彼女は一瞬、目を険しくしたが、抗わず身を寄せてきた。

女の匂いがした。満艦飾の『ローズ化粧品店』の例の化粧の濃い、女主人の鼻をつく匂いとは違う、控えめの甘い匂いであった。無性に彼女が愛しく思えた。この歳になって、はじめて人肌が恋しいと思った。いいようのない淋しさを感じた。

「今までありがとうな」耳もとでそう言うと「何もしてないわよ、私」

「淋しくなるな」また同じことを言った。

「私も淋しい。今まで、ありがとう」

彼女は清吉の腕の中であえぐように小さく言った。

彼が力をいれると、彼女は体を開いた。咲子の遺影の前で、ふたりは体を絡めた。

久しく味わったことのない、甘酸っぱさを五感に感じた。

「もっと早くから、こうなればよかったな」

「私、ずっと待ってたのよ」

彼女は身繕いしながらぼつんと言った。

「引っ越し手伝うよ」

為子を送り出しながら言ったが、彼女は無言のまま、うつむいて家に帰って行った。

彼女は翌日、一日だけ商いをやったが、その翌日はシャッターを降ろしたままで、留守にした

。店内のあらかたの整理は業者にまかせて、数日後、為子は「体に気をつけてね。ありがとう」たったそれだけ言って、嵐のように去って行った。

清吉はただ無言で頷くだけで見送った。

あの夜以来、彼女の甘い匂いと体の温もりが忘れられなかった。

悶々と日を送った。年がいもなく悶々とした。そしていいようのない寂寥感にも襲われた。

年が明けても房は退院して来なかった。

寒々とした店内で、清吉は富造とふたりで背を丸め、言葉を交わすでもなく冷めた酒を毎晩のように呑んだ。とりたてて話題もなかった。

それでもふたりは、しばらく無言で肩を並べて酒を呑んだ。重苦しい空気が流れた。

「浜屋はうまく三途の川を渡ったかな」

富蔵が突然ぼつんと言った。

「あいつのことだ。今頃は閻魔さんとうまくやってるよ」

「ふたりで酒でも呑んでるか」

「そのうち、わしらも加わるよ」

富蔵の頬が少し弛んだ。清吉もつられて頬を緩めた。

『まるや』を出た清吉の体の中を烈風が吹き抜けていった。身震いして、思わずジャンパーの襟元に手をやった。

底冷えのする無人の黒い浜通り商店街を、一陣の冬の夜風が音をたてて襲ってきた。

『ローズ化粧品店』のシャッターがガタガタと唸った。女主人は、その後も町には帰って来なかった。どうするつもりだろう。

『江戸や』の中から「はい、今晚のおかずだよ」と言いながら、今にも為子が惣菜の入った、タッパーを持って出てくるような気がした。

しばらくその場に立ち、彼女を待った。

「おい、為子、早く出てこいよ。待ってるんだよ」

小さく声をかけた。

しかし、いくら待っても彼女は出てはこなかった。

はっと思い直して、体を反転して路地に向かって歩を進めようとしたとたん、清吉は不覚にも躓きよろけた。

そして、そのまま前のめりに、『江戸や』のシャッターに勢いよく頭から突っ込んで行った。